

高鍋町文化財調査報告書 第6集

町内遺跡発掘調査報告書

老瀬坂上第2遺跡

高鍋城跡

1991.3

こ ゆ ぐんたかなべちょう
宮崎県児湯郡高鍋町教育委員会

老瀬坂上第2遺跡

頁	行	誤	正
5	8	約 4 0 cm	約 6 0 cm

序

高鍋町教育委員会では、平成2年度において中世から近代にわたる遺跡、2ヶ所について発掘調査を実施致しました。

本報告書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究上役立つことが出来れば幸甚に存じます。

調査に際し、多くの方々のご理解ご協力を賜りましたことに対し、心から感謝の意を表する次第であります。

平成3年3月30日

高鍋町教育長

岩永高徳

例　　言

1. 本書は、老齋坂上第2遺跡及び高鍋城跡において実施した遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は国庫補助・県費補助を導入し、平成2年10月1日から同年12月18日までの期間で高鍋町教育委員会が実施した。
3. 調査の組織
調査の主体 高鍋町教育委員会
教育長 岩永高徳
社会教育課長 加藤秀雄
同課長補佐 江川雅章
同主事 山本格（調査員）
4. 本調査については、県文化課主査 面高哲郎氏、同主任主事 北郷泰道氏にそれぞれご指導、ご教示いただいた。
5. 本書に使用した方位はすべて磁北である。またレベルは海拔絶対高である。
6. 本書の執筆・編集は山本 格が行った。
7. 出土遺物は高鍋町教育委員会で保管している。

総 目 次

老瀬坂上第2遺跡

本文目次

Iはじめ	1
1. 調査にいたるまで	1
2. 立地と歴史的環境	1
II調査の記録	3
1. 調査の概要	3
2. 遺構と遺物	5
IIIまとめ	12

挿図目次 第1図 周辺遺跡分布図(1/25000)	2
第2図 トレンチ位置図(1/400)	3
第3図 遺構現況図(1/300)	4
第4図 第IVトレンチ各部土層図(1/40)	6
第5図 北辺部分 空堀・土壙断面図(1/40)	8・9
第6図 東辺部分 空堀・土壙断面図(1/40)	8・9
第7図 南辺部分 空堀断面図(1/40)	10・11
第8図 西側部分 空堀・土壙断面図(1/40)	10・11
第9図 高城川の戦い布陣図(部分)	12
第10図 遺物実測図(1/2)	13
図版目次 図版1 遺物写真	14
図版2 遺構各部	14
(1) 全景(南西から)	(2) IVトレンチ(北西から)
(3) 北辺土壙断面	(4) Vトレンチ(西から)

高鍋城跡

本文目次

Iはじめ	18
1. 調査にいたるまで	18
2. 立地と歴史的環境	19
II調査の記録	20
1. 調査の概要	20
2. 遺構	21
3. 遺物	23
IIIまとめ	23

挿図目次 第11図 周辺遺跡分布図(1/25000)	18
第12図 高鍋城地形図(1/5000)	19
第13図 トレンチ位置図(1/600)	20
第14図 第Iトレンチ南端北壁土層断面図(1/20)	21
第15図 発掘区遺構配置図(1/120)	22
第16図 出土遺物実測図(1/2、1/4)	24
図版目次 図版3 出土遺物	25
図版4 遺構各部	25
(1) 調査区全景	(2) 石列
(3) 裏込石検出状況	(4) 瓦溜検出状況

I はじめに

1. 調査にいたるまで

老瀬坂上第2遺跡発掘調査の発端は、遺跡周辺の農地造成計画であった。かねてより当地には、溝状の窪みの存在が一部の人々に知られていた。踏査の結果、空堀と思われる遺構の存在を確認し、老瀬坂上第2遺跡とした。この遺跡の取り扱いについて地権者と協議の結果、現状のままで遺跡を保存することは困難と判断した。そのため、地権者の協力を得て遺跡確認調査にいたった。

2. 立地と歴史的環境

老瀬坂上第2遺跡は、小丸川南岸の標高100mの台地の縁辺に位置する。遺跡付近からは、対岸の台地上面から日向灘まで見渡せ、眺望は良好である。また、遺跡の東側からは小谷が生じ、西方から南側をめぐる小谷と合流して南方向へと続いている。このことから、遺跡は、台地面の小丘頂部に位置するといえる。

老瀬坂上第2遺跡のある台地、小丸川河岸の微高地、さらに対岸の台地には、各時代にわたって存在したと考えられる遺跡が数多くみられ、連続とした人々の営みがうかがわれる。旧石器時代から縄文時代の遺跡には、ナイフ形石器や手向山式土器の出土した耳切遺跡がある。弥生時代では台地上で、下耳切第2遺跡、北牛牧第1遺跡があり、台地下段の微高地には、北中原、南中原遺跡がある。古墳時代に入ると数多くの古墳が付近にみられる。北方対岸の台地に国史跡川南古墳群が、東方対岸の台地に国史跡持田古墳群がある。遺跡付近には、東方の河岸微高地に山王古墳、台地の南方に牛牧古墳がある。さらに台地斜面には、老瀬横穴墓がある。歴史時代では、中世に、北方対岸台地に高城が築かれる。この高城を中心とする一帯は、天正6年（1578）に島津軍と大友軍による耳川の合戦があり、天正15年（1587）には、豊臣秀吉の九州征伐での、豊臣軍と島津軍による高城川の戦いの戦場として知られる。耳川の合戦に関するものでは、北方の対岸台地に国史跡、宗麟原供養塔がある。

参考文献

- ・『全国遺跡地図 宮崎県』文化庁文化財保護部 昭和52
- ・『川南町の埋蔵文化財－遺跡詳細分布調査報告書－』川南町教育委員会 昭和58
- ・『高鍋町史』高鍋町 昭和62
- ・『高鍋町遺跡詳細分布調査報告書』高鍋町教育委員会 平成元

注 図-1 周辺遺跡詳細分布図で、高城跡は『全国遺跡地図 宮崎県』から、川南町内の文化財範囲は『川南町の埋蔵文化財－遺跡詳細分布調査報告書－』からそれぞれ転写した。



本図は、国土地理院発行の2万5千分の一地形図を用いたものである。

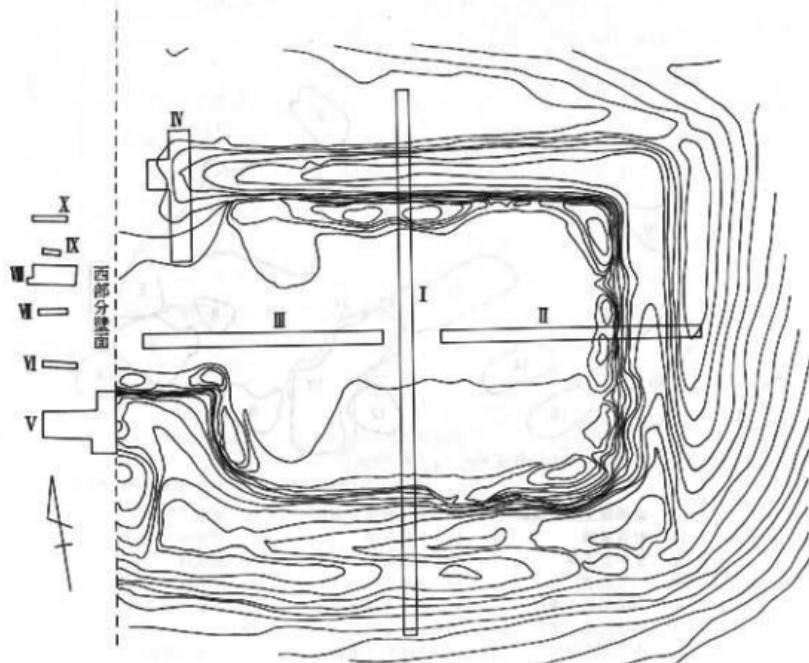
1 老瀬坂上第2遺跡	10 北牛牧第4遺跡	19 鳥帽子形遺跡
2 野首遺跡	11 牛牧古墳	20 老瀬横穴墓
3 北中原遺跡	12 北牛牧第1遺跡	21 高城跡
4 山王古墳	13 下耳切第3遺跡	22 湯迫遺跡
5 羽根田第1遺跡	14 下耳切第2遺跡	23 宗麟原供養塔
6 羽根田第2遺跡	15 牛牧原遺跡	24 川南古墳群
7 南中原遺跡	16 老瀬坂上遺跡	25 天神前遺跡
8 仙藏寺遺跡	17 東小並遺跡	
9 北牛牧第3遺跡	18 耳切遺跡	

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

II 調査の記録

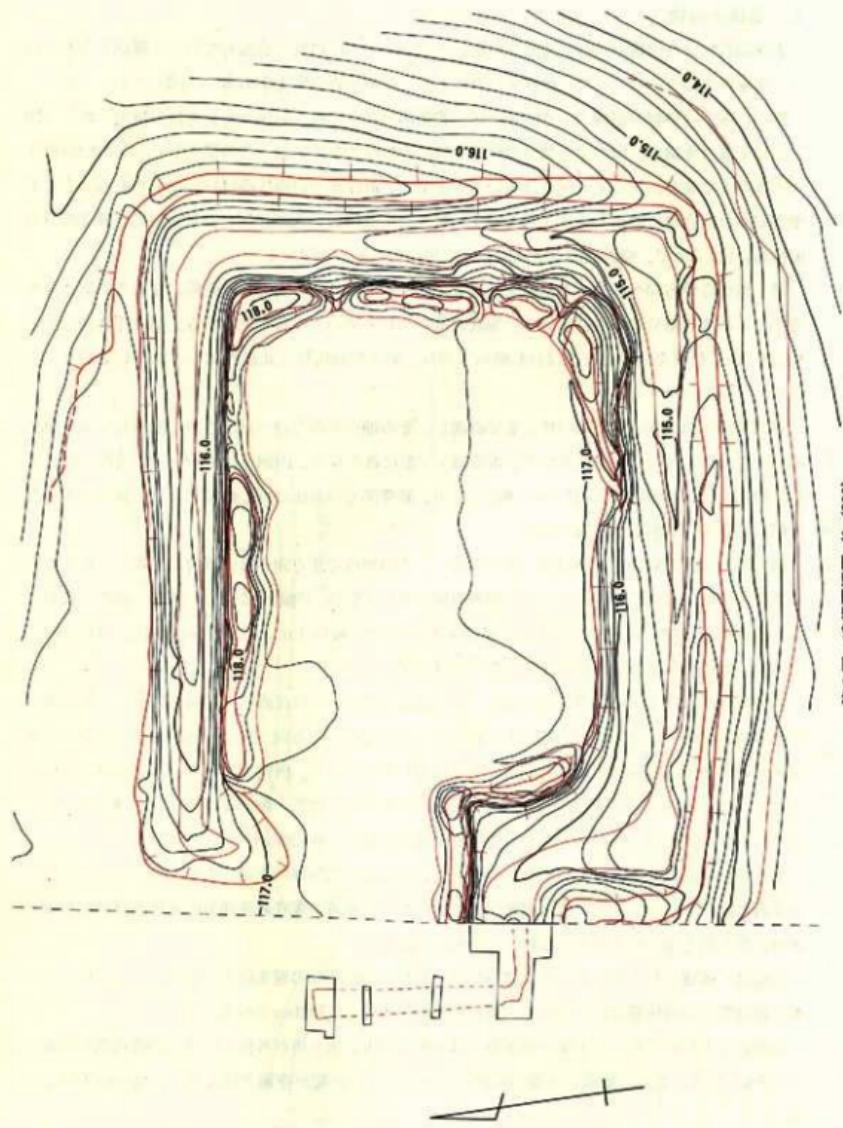
1. 調査の概要

老瀬坂上第2遺跡の調査は、1990年10月1日から開始した。まず、踏査で確認した遺構の残存状況を確認するため、地面を覆う小木や草等を除去する作業を行った。その結果、遺構として空堀・土塁が良好に残存したが、西側の畠地とは段差がつき、西部分は既に消滅していた。地表面で、須恵器片など若干の遺物を採集した。10月18日から、空堀・土塁の現況測量、西側畠地との境界壁面の土層確認、トレンチ10本の設定等に入った。その結果、消滅していた西側畠地の耕土下で、空堀の底部の残存が判明し、空堀のプランはほぼ確認できた。しかし、土塁に囲まれる区域について、建造物などの施設の確認にはいたらなかった。また、空堀・土塁の遺構の下層で、溝状遺構やピット等を検出し、縄文時代から古墳時代と考えられる土器片が出土した。このことから下層に遺跡が複合していることが推測されたが、確認にはいたらなかった。10月29日から実測に入り、11月13日調査を終了した。調査対象面積は約2300m²で、そのうち発掘調査面積は約115m²である。



第2図 トレンチ位置図 (1/400)

第3圖 游標尺況圖 (1/300)



2. 遺構と遺物

表面調査により遺構の残存が確認されたが、西部分においては既に消滅していた。確認できたものは、空堀と土塁であり、これに付属するものとして空堀外周の盛土がある。（図-3）

空 堀 空堀の始端（一方の端）は、北西部分にみられ、第IVトレンチにて検出した。（図-2）空堀の先端は、堀の中位部分の検出では、方形を示している。この地点から、北方向へ約5mの地点まで続き、ここでの堀底は開いたU字型で、最深部分の海拔高は115.42mである。ここで東方向へほぼ直角に曲折して第1角を成す。第1角で曲折後の堀底は開いたU字型で、最深部分の海拔高は114.8mで、曲折前地点と比較して約40cm下がる。（図-4）

第1角から東方向へ約30mの地点まで直進し、その地点で南方向へほぼ直角に曲折して第2角を成す。この北辺部分の中央において、堀底は開いたU字型で、左右対象である。堀の深さ約1.9m、幅約3.8m、最深部分の海拔高は114.88mであり、第1角曲折後（北辺西端）と比較して約8cm上がる。（図-5）

第2角から南方向へ約25mの地点まで直進し、その地点で西方向へほぼ直角に曲折して第3角を成す。この東辺部分の中央において、堀底はV字型に近くなり、内側へはやや弱く、外側へはやや強い傾斜を示す。堀の深さ約1.6m、幅約3.8m、最深部分の海拔高は114.48mであり、北辺部中央と比較して約40cm下がる。（図-6）

第3角から西方向へ約32mの地点まで直進し、その地点で北方向へほぼ直角に曲折して第4角を成す。この南辺部分の中央において、堀底は開いたU字型で、内側へは弱く、外側へは強い傾斜を示し、両側とも中位に小段をつける。堀の深さ約1.6m、幅約4m、最深部分の海拔高は113.64mであり、東辺部中央と比較して約84cm下がる。（図-7）

第4角から、約7mの地点まで直進し、その地点で西方向へほぼ直角に曲折して第5角を成す。

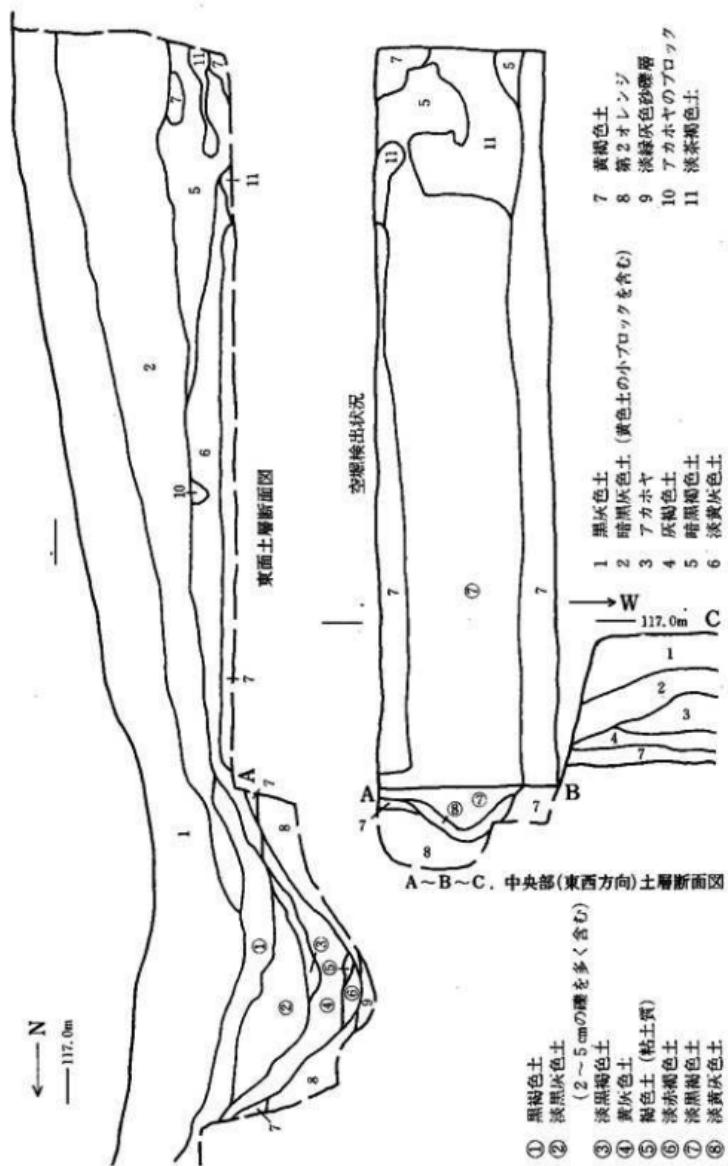
第5角から西方向へ約8mの地点まで直進し、その地点で北方向へほぼ直角に曲折して第6角を成す。第5角と第6角の中央において、堀底は開いたU字型で、内側へは弱く、外側へは強い傾斜を示す。内側へは、一度平坦に近くなり、再び立ち上っていく。堀の深さ約1.7m、幅約4.8m、最深部分の海拔高は114.84mであり、南辺部中央と比較して約120cm上がる。（図-8）

第6角から北方向へ約11mの地点まで直進し、その地点で空堀の末端（もう一つの先端）となる。第6角は第Vトレンチにて、ほぼ堀底面を検出した。第6角の堀底最深部分の海拔高は115.23mであり、第5角と第6角の中央と比較して約40cm上がる。

末端は、第VIトレンチにて、中位部分を検出した。中位部分の堀先は方形を示し、この地点での堀底最深部分の海拔高は115.05mで、第6角部分と比較して約20cm下がる。

空堀は1本がめぐり、第1角～第4角、第6角が内折、第5角が外折して7つの直線部を形成し、約120mとなる。空堀の始端と末端の間隔は約9mで、この間が空堀で囲まれた区域への入口となる。

出土遺物 7は、土器底部片で、器色は灰白色を呈する。堀始端と第1角の中間付近、地表下約40cmで出土。15は貨幣で、堀始端と第1角の中間付近、堀中位検出面にて出土。（図-4）



第4図 第Mトレンチ各部土層図 (1/40)

土 壁 土壁は、空堀の内辺にみられる。確認できるのは、北辺部西端から第2角を経て東辺部を巡り、第3角を経て南辺東部までと、第4角から第5角を経て畠地境界までの部分である。

北辺部中央では、土壁の基部において、アカホヤのブロックが底辺約2m、高さ約50cmの台形状を示す。その上層には、茶褐色系の土と黒褐色系の土が、積み上げられ築かれている。アカホヤのブロック底面から残存する土壁の頂点までの高さは、約140cmである。（図-5）

東辺部中央では、土壁の基部に、アカホヤ・黒色土のブロックがみられ、土壁が残存する部分は、茶褐色系の土と濃褐色系の土とを交互に積み上げて土壁を築いたことが確認できる。土壁の基礎とした部分は幅約2mである。（図-6）

南辺部分では、東部において堀側へ崩落している。中央に土壁は確認できないが、空堀が内側へ上がりきった肩の部分には、アカホヤのブロックなどの人為の土壁が確認できる。（図-7）

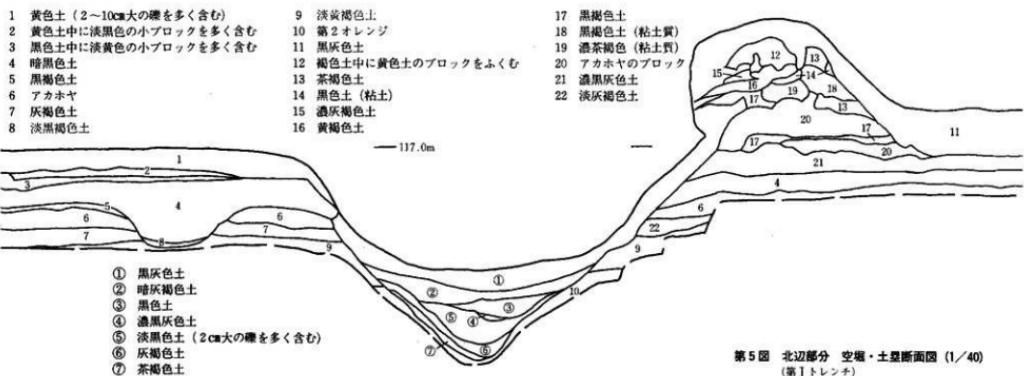
西部壁面（空堀第5角と第6角の中間）では、土壁に褐色のブロックから成る部分が存在するが、基部と思われる部分には、人為の上層は確認できない。（図-8）

出土遺物 10は黒曜石の石核小片である。1は土器片で、器色は褐色を呈す。5は土器片で、一部に段差があり、外面に刷目を施す。いずれも、北辺部中央土壁の基部、アカホヤのブロック低部付近で出土。8は甕又は壺の底部で、内面は指ナデ調整、土壁内域南端部のアカホヤのブロックより出土。

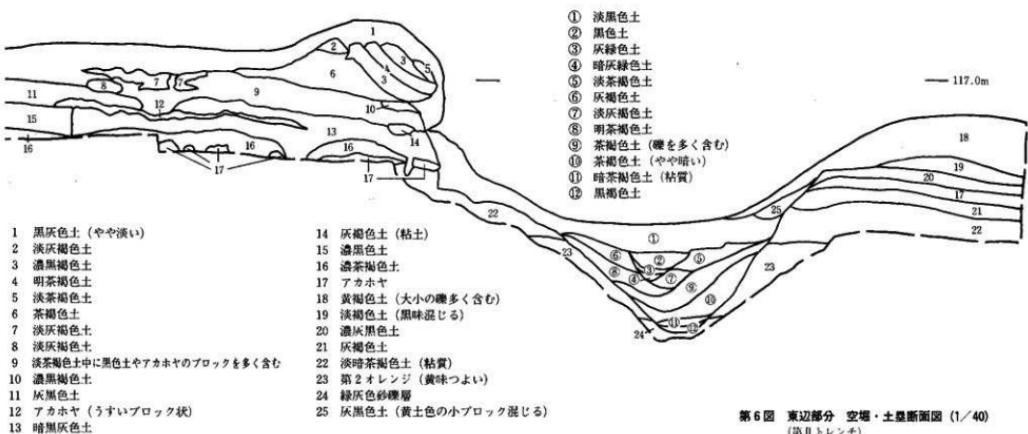
土壁内域 土壁に囲まれる区域は平坦で、北部から南部へゆるやかに傾斜する。土層の変化はみられないが、城内の東部と西部において、細い帯状のアカホヤが本来のアカホヤ層のより上層にみられる。第Ⅰ・Ⅱトレンチの壁面、底面にて溝状遺構、ピット等を検出したが、精査にはいたらなかった。

出土遺物 12・13は円形薄板状金具で、直径2cm、厚さ1mmである。第Ⅰトレンチ底面で検出のピット付近より出土。2は土器片で、器色は赤褐色を呈し、一部ふくらみがある。第Ⅱトレンチ西部、地表下約40cmで出土。4は土器片で、器色は黄色土を呈する。第Ⅱトレンチ東部、地表約20cmで出土。3は土器片で、内面が黒褐色、外表面は褐色を呈し、内外面に貝殻条痕文を施す。第Ⅲトレンチ中央、地表下約60cmで出土。14は棒状金具片で、断面は方形を成す。第Ⅲトレンチ西部、地表下約50cmで出土。

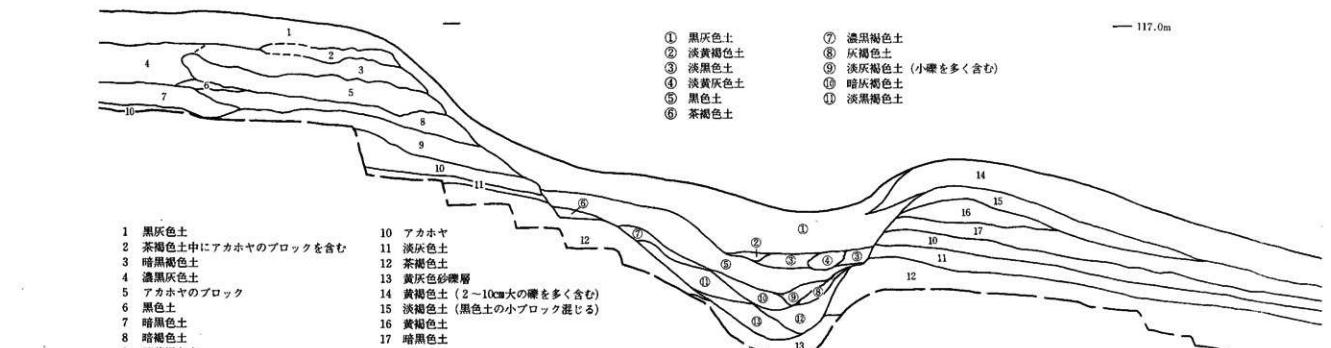
空堀外周 空堀の外周は、地表付近の土層に疊が多くみられた。特に西部分（空堀第5角と第6角の中間）では、疊を含む土が地表面付近で小丘を形成するのが確認できる。（図-8）また、北辺空堀中央の外側では、空堀と並行しない溝状遺構を検出したが、精査にはいたらなかった。



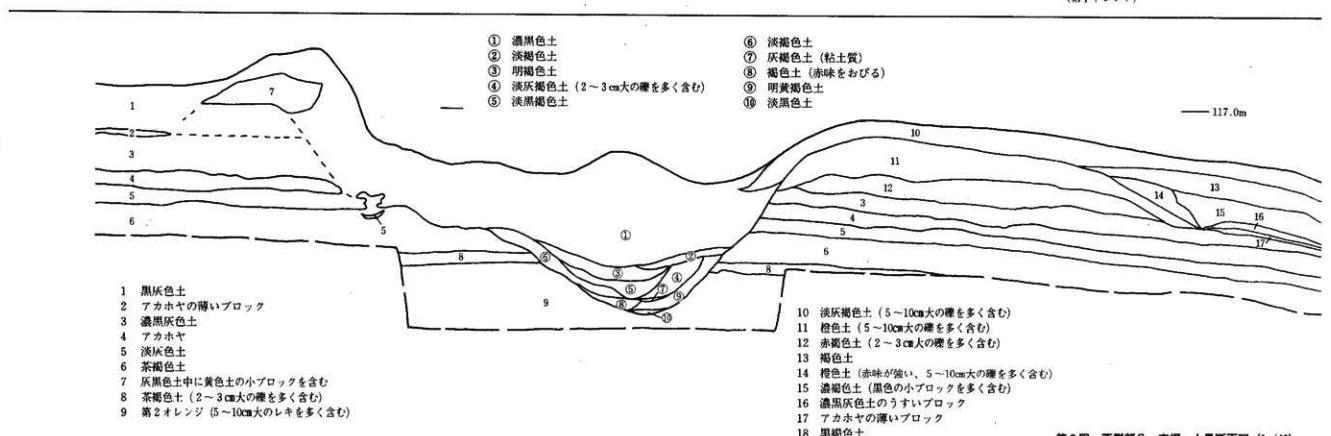
第5図 北辺部分 空堀・土壙断面図 (1/40)
 (第1トレンチ)



第6図 東辺部分 空堀・土壙断面図 (1/40)
 (第2トレンチ)



第7図 南辺部分 空堀断面図 (1/40)
(第1トレンチ)



第8図 西側部分 空堀・土壌断面図 (1/40)

表面採集の遺物 11は金環である。一部分両側から挟まれた形での破損痕がある。6は須恵器片である。内面に当て具によるタタキ、外面に釉薬がみられる。9は染付の碗の底部で、高台を有し、その内側も施釉する。腰部に蕉葉文、見込に花文を配する。いずれも、調査区北西隅、西側畠地との境界付近にて採集。

III まとめ

老齋坂上第2遺跡は、遺物からみて、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が複合していると考えられ、その上に空堀や土塁が設けられたといえる。空堀を掘る際に下層の遺跡に影響を与える、遺物が、掘られた土とともに地表近くに動かされ、それらの一部を今回の調査で得たといえよう。

空堀は、単に西面を入口として巡るのではなく、入口付近でさらに西側へ張り出し、北へ延ばすことで入口が見通されないようにする、萬の機能を付加した空堀のプランであると思われる。このようなプランは、中世から近世の城郭などでみられるものとの関連がうかがえる。

土層観察から空堀と土塁を捉えると、空堀の底部にあたる礫が多く含む層からの土が堀の外周の上層にある。空堀の上、中部にあたるアカホヤ土からのブロックが土塁の基部にある。これらのことから、空堀を掘る際に、上～中層の土は堀内側へ出し築き固めて土塁とし、下層の礫の多い土は堀外側へ出し盛り上げる。このような構築手順が推測される。

この空堀と土塁をもつ遺跡を捉えるのに、有力な説としては、耳川の合戦（1578）あるいは、高城川の戦い（1587）に関連する遺跡とするものがある。現在、これらの合戦に関して確認している史料は乏しいが、そのうちの一つに「高城川の戦い布陣図」^(注)がある。これは、耳川の戦いに関するものとされ、文政3年（1820）に書き写されたものである。これには、老齋坂上第2遺跡の空堀とよく似た形のものが描かれ、「以久公御陣」とあり、島津征久の陣地として記されている（図-9）。ただし、この絵図を裏付ける史料の確認にいたっておらず、島津征久の陣地と断定するには、さらに多方面からの史料を確認し、考察していく必要があると思われる。

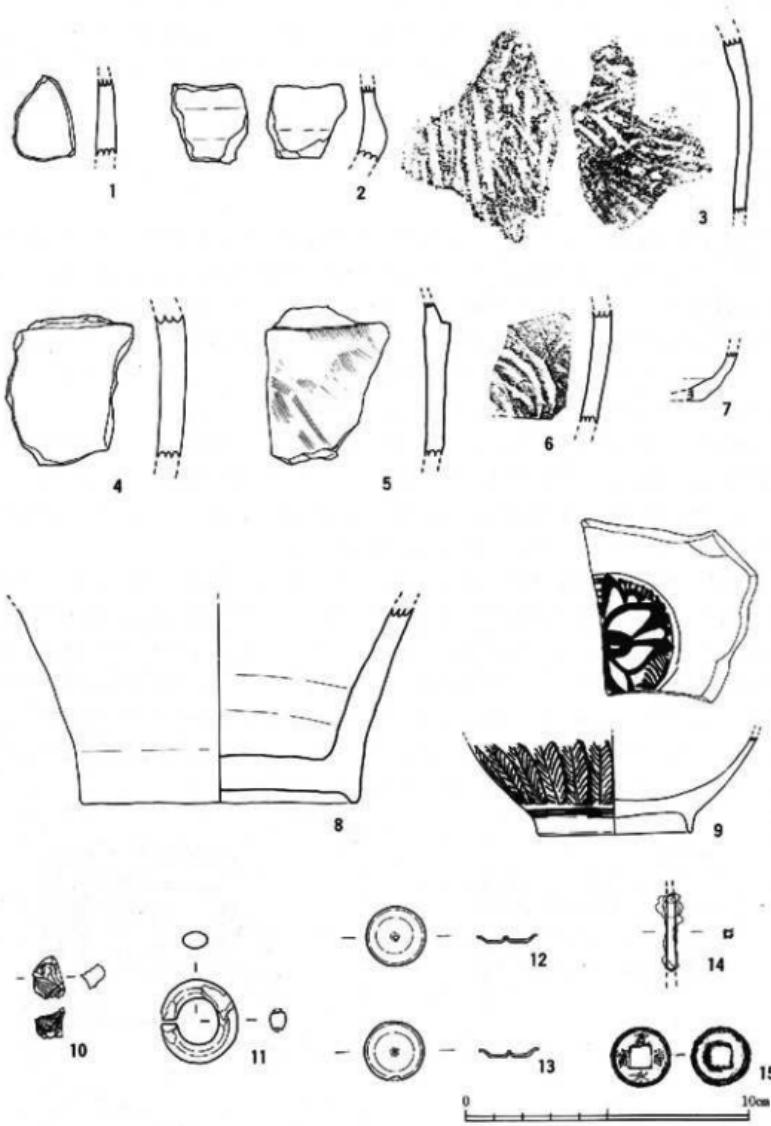
参考文献

- ・『城―山城から平城へ』週刊朝日百科日本歴史21 朝日新聞社 昭和61

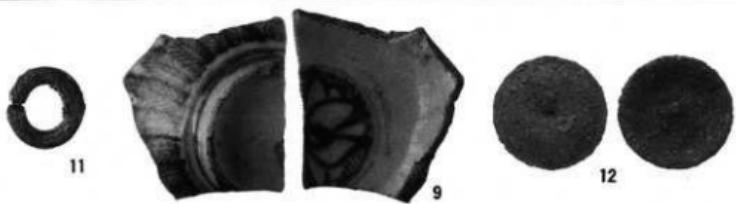
（注）この絵図は、高鍋町歴史総合史料館の御協力を得て掲載した。



第9図 高城川の戦い布陣図（部分）



第10図 遺物実測図 (1/2)



図版1 遺物 (9・11は $\frac{3}{4}$ 12は $\frac{1}{2}$)



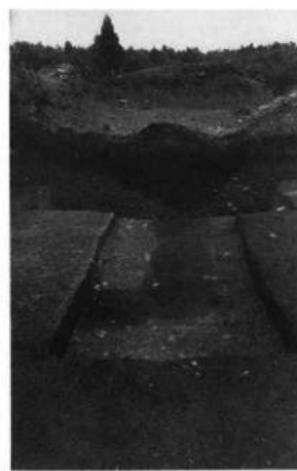
1 全景 (南西から)



2 IVトレンチ (北西から)



3 北辺土壘断面



4 Vトレンチ (西から)

図版2 遺構各部

高 鍋 城 跡

編 誌 雜 誌

編 誌 雜 誌

編 誌 雜 誌

編 誌 雜 誌

編 誌 雜 誌

編 誌 雜 誌

編 誌 雜 誌

編 誌 雜 誌

編 誌 雜 誌

編 誌 雜 誌

編 誌 雜 誌

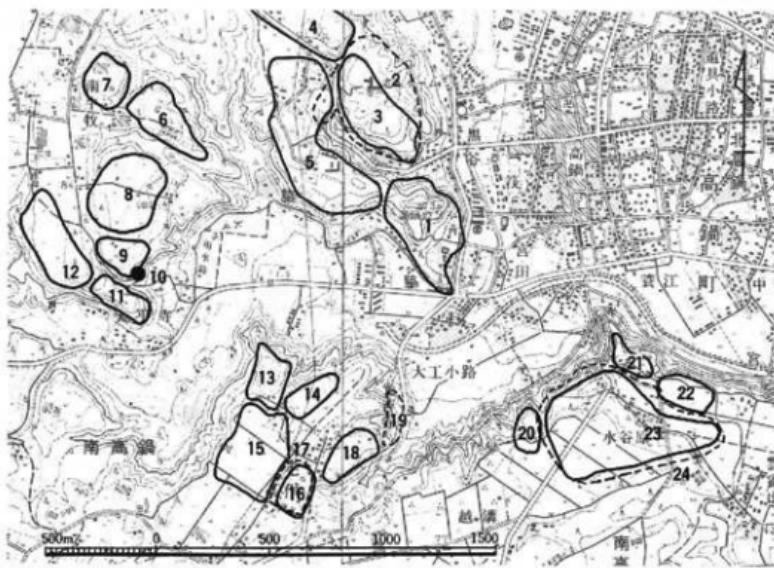
編 誌 雜 誌

編 誌 雜 誌

I はじめに

1. 調査にいたるまで

高鍋城（財部城）は、中世に築かれた山城で、江戸時代に、高鍋藩主秋月氏の居城として整備された。今日、城跡は舞鶴公園として親しまれ、政庁跡は風致地区に指定され、城山一帯は町指定文化財である。高鍋城の建造物は既に失われているが、城濠、石垣が残存している。建造物の一つに三層櫓があった。その規模等については不明であるが、所在が伝えられる付近には礎石もみられる。今回この三層櫓に関して、その位置・規模等の確認調査を実施した。



本図は、国土地理院発行の2万5千分の一地形図を用いたものである。

1 高鍋城跡	9 豊丁場第1遺跡	17 毛作古墳
2 大戸ノ口古墳	10 土持墓地	18 毛作第4遺跡
3 大戸ノ口第1遺跡	11 大平寺第1遺跡	19 光音寺横穴墓
4 大戸ノ口第2遺跡	12 大平寺第2遺跡	20 杉谷上遺跡
5 大戸ノ口第3遺跡	13 毛作第3遺跡	21 水谷原第1遺跡
6 南牛牧第3遺跡	14 毛作第1遺跡	22 神祭野遺跡
7 南牛牧第4遺跡	15 毛作第2遺跡	23 水谷原第2遺跡
8 豊丁場第2遺跡	16 山伏山第2遺跡	24 水谷原古墳

第11図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

2. 立地と歴史的環境

高鍋城跡は、小丸川河口に広がる平野の西方台地縁辺の舌状地に位置している。城域の北は谷、東は平野で、南に宮田川が流れ、さらに南は台地となる。西には崖根が続き、台地につながる。城域での最高地点は海拔約70mで、全方位への眺望が可能である。

高鍋城跡の周辺の台地上には、遺跡が数多くみられる。旧石器時代から縄文時代では、南東方向に妻道南遺跡、南方の台地縁辺には神祭野遺跡や水谷原第1遺跡、北側の谷を隔てた台地には大戸ノ口第2遺跡がある。弥生時代には、南方の台地に毛作第1～第3遺跡、西方の台地には大戸ノ口第3遺跡がある。古墳時代には、南方の台地に水谷原古墳、南方の台地中腹には光音寺横穴墓、西方の台地には大戸ノ口古墳がある。



第12図 高鍋城地形図 (1/5000)

高鍋城（財部城）史概略 財部城は、その創築を九世紀半ばとみられ、当時、日向の地で勢力を誇った土持氏が約600年間にわたって居城した。土持氏については、西方台地中腹に土持墓地が知られている。その土持氏は伊東氏に敗れた。長禄元年（1457）、伊東氏の抱城となった財部城には、伊東氏の武将落合氏が地頭職として約120年間居城した。天正5年（1577）伊東氏は薩摩の島津氏に敗れ、財部城はその後約10年間島津氏の管理下におかれた。天正15年（1587）、豊臣秀吉による九州征伐で島津氏は敗れ、九州平定後に、築前国から秋月氏が財部に移封された。はじめ財部城には秋月氏の武将が入ったが、慶長9年（1604）から藩主秋月氏が居城し、そのうちに財部を高鍋と改め、明治にいたるまで藩政をとった。城郭の修築は、初代秋月種長から3代秋月種信にかけて行われ、今日知られる城の形が整えられた。

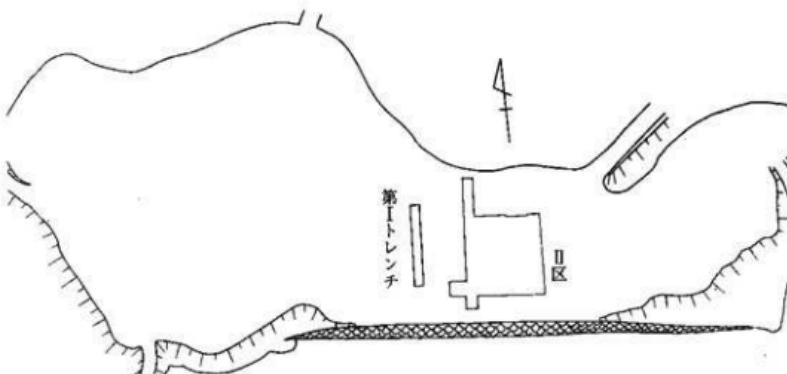
参考文献

- ・『高鍋城』 高鍋町教育委員会 昭和50
- ・『高鍋町史』 高鍋町 昭和62
- ・『高鍋町遺跡詳細分布調査報告書』 高鍋町教育委員会 平成1

II 調査の記録

1. 調査の概要

今回の確認調査は慶長14年（1609）に建てられた三層櫓の正確な位置及び規模等を確認することを目的とした。調査の対象としたは、諸の丸に現存する石垣に南側を支えられている郭で、頂上部分の南側下段にあり、現在は梅園となっている区域である。この郭の面積は約1600m²である。1990年11月14日から調査を開始する。礎石配置確認のため調査区内を除草し、礎石探査。第1トレンチ



第13図 トレンチ位置図 (1/600)

の設定。11月15日、第Iトレンチの東側に第II区を設定し、約5cm程掘り下げる。同区で礎石及び石列を確認する。11月19日、II区の西辺部分を北方（頂上側）と、南方（石垣側）へ延長する。II区北突部にて瓦溜を検出する。同区南突部にて石垣の裏込めと、多数の瓦片を検出する。11月20日、第Iトレンチの南端を掘り下げ、版築の状況を確認する。11月22日、実測及び一部埋めもどし作業。11月26日、調査対象区全域について礎石位置の測量。11月28日II区北突部、南突部、礎石掘方の確認。12月18日、調査を終了する。調査対象面積約1400m²、そのうち発掘調査面積約83m²であった。

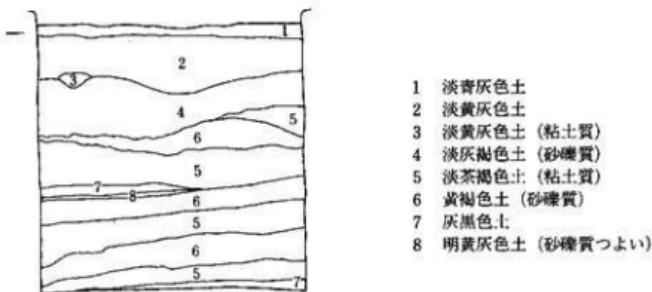
2. 遺構

今回の調査において、特筆すべき遺構は確認できていない。礎石は、発掘区の内外に存在することを確認したが、建造物に関連する配置はみられない。礎石掘方は一個の礎石について調査したが、掘方は認められなかった。II区の南辺において、石垣から約3.5mを隔てる部分に、石垣とほぼ並行して石列を確認した。石列は約7mで、直径約40cm程の上部偏平の石、約15個が一列に並び、小石や瓦片が付随する。

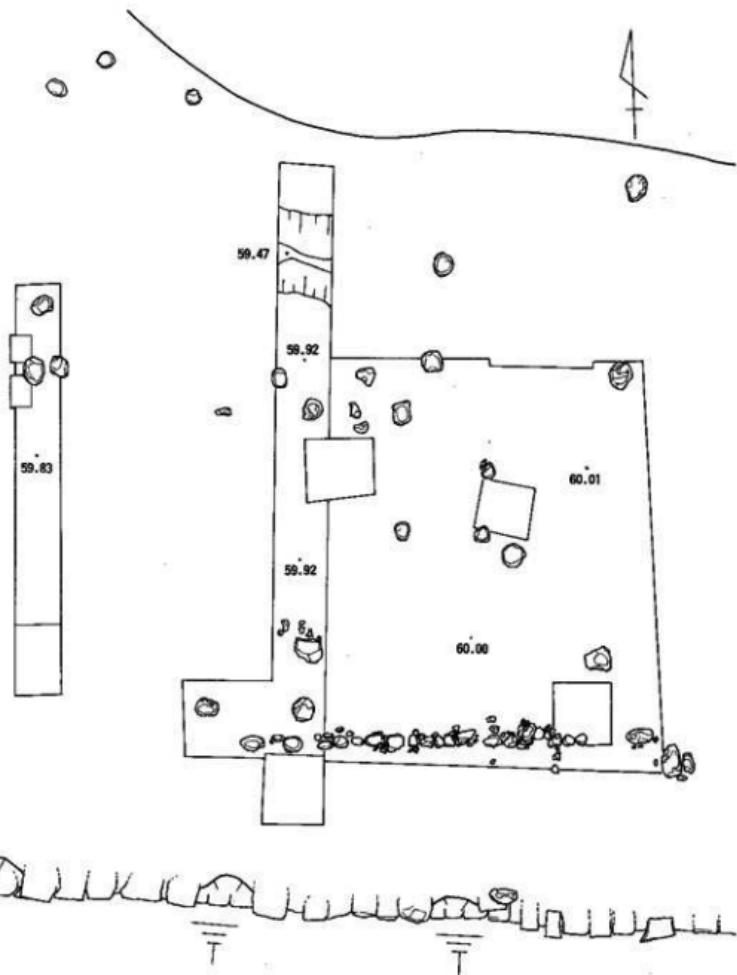
II区南突部では、石垣から約1mを隔てる場所で、石垣裏込めの割栗石を検出した。ここでは、石と瓦片がほぼ同じ割合で混在していた。瓦片がほぼみられなくなるあたりまで掘り下がったが、遺構の確認にはいたらなかった。

II区北突部では、郭の平坦部北辺から約1m南側付近で北東から南西方向にかけて幅約2.5mの瓦溜を検出した。瓦片を主として、鉄具片、土器片などを出土し、礫も混在していた。深さ約45cmまで瓦片が密集して堆積していた。瓦片をほぼ振り上げた後は溝状の産みとなつたが、その底面には、瓦片も若干残存していた。

第Iトレンチ南端にて、土層は、黄褐色系の砂を主とする層と茶褐色系の粘質のある土の層とが、交互に堆積しており、版築の状況を確認した。



第14図 第Iトレンチ南端部北壁土層断面図（1/20）



第15図 発堀区造構配置図 (1/120)

3. 遺 物

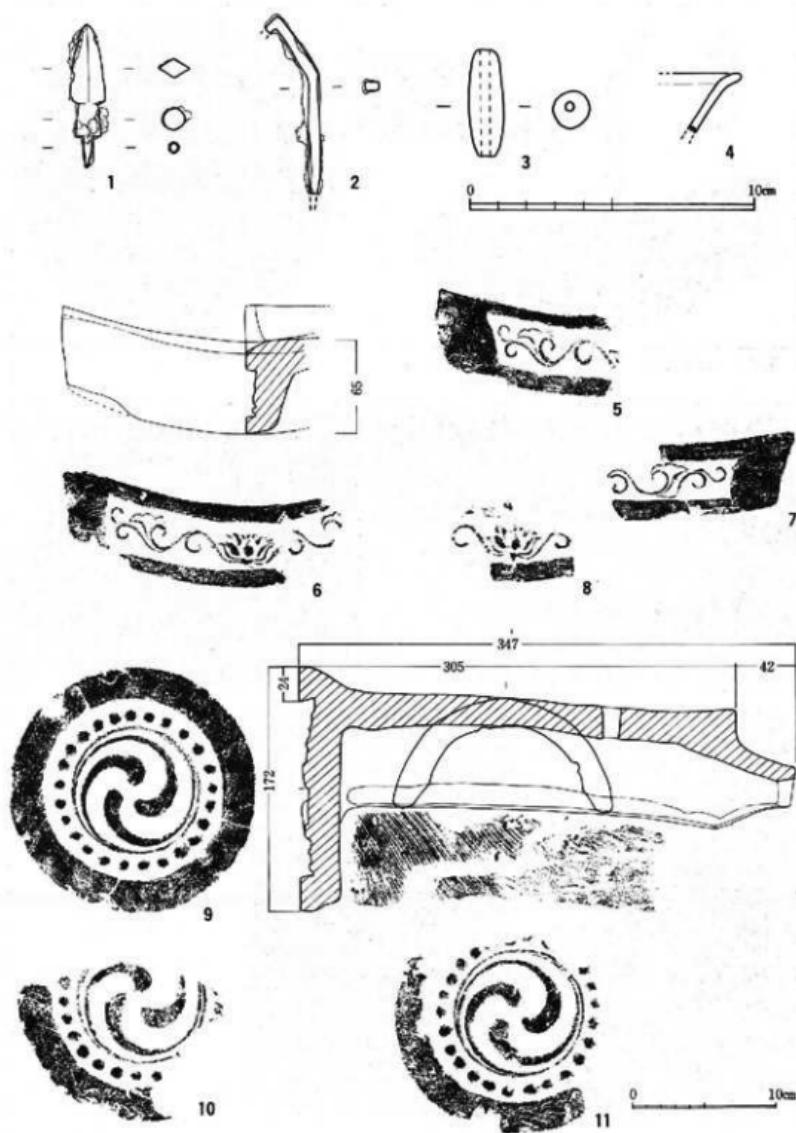
遺物は瓦片約800点の他、土器片、鉄釘などを得た。1は鉄鎌で、長さ5cm。2は鉄釘で、一端を直角に曲げ頭部を成し、断面は方形である。4は陶磁器片で、壺の口縁で、施釉され器色は薄緑色を呈する。3は瓦製土垂で、長さ3.7cm、縦方向に直径3mmの穴を貫く。いずれもⅡ区北部にて出土。

5、6、7、8、は軒平瓦である。5は唐草文を施す。Ⅱ区北突部瓦溜から出土。6は心飾に花文を施し、左右に唐草文を派出させる。Ⅱ区南突部から出土。7は唐草文を施す。7は5、6の唐草文と比較し、先端の1単位の上向きの唐草が、より先に延びる形で派出する。Ⅱ区南突部から出土した。8は心飾で、6と同范と考えられる花文を施す。Ⅱ区南突部分から出土。

9、10、11、は軒丸瓦である。9は直径17cm、珠文帯に25個の大粒の珠文を配する左三巴文軒丸瓦。巴文の頭部は尖り互いに接しない。巴文の尾部は、隣の巴と接続して円圈をなす。Ⅱ区北突部瓦溜から出土した。10、11は、ともに9と同范と考えられる。10はⅡ区北突部瓦溜から出土。11はⅡ区南突部から出土。

III まとめ

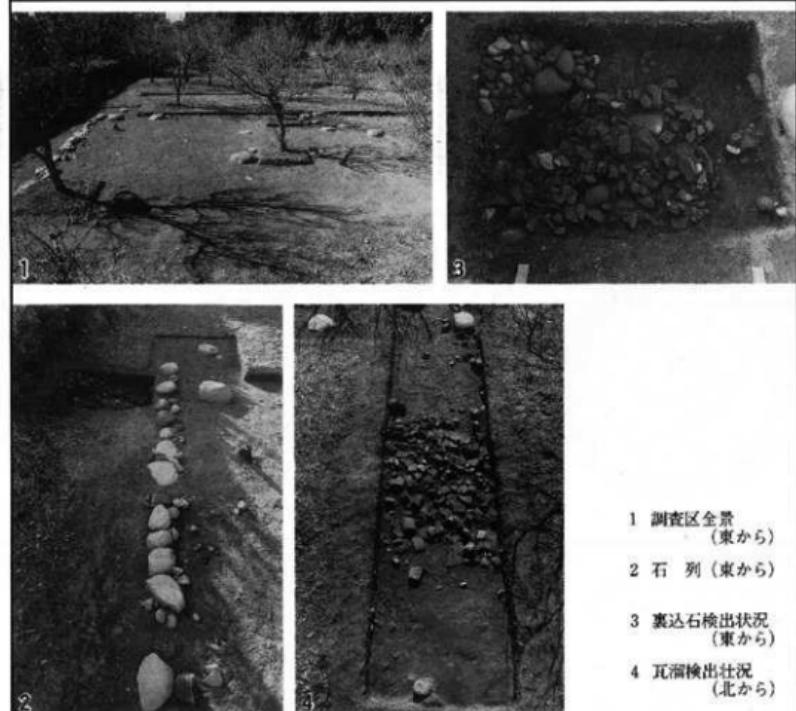
今回の確認調査において、檐の正確な位置、規模について断定できるだけの事項の確認にはいたらなかった。資料としては、石列、礎石、瓦溜、版築状況などを得たが、石列や瓦溜の意味について解明するにはいたらなかった。礎石は、動かされているものと、動いていないものとの区別がつき難く、このことを解明する調査も必要と思われる。今回の調査によって得られた資料や課題は、次の調査の機会が得られた際の有効な手がかりとなるものである。



第16図 出土遺物実測図 (1/2, 1/4)



図版1 出土遺物 (1・2は3% 6・7・9は3%)



図版2 造構各部

1 調査区全景
(東から)

2 石列 (東から)

3 裏込石検出状況
(東から)

4 瓦溜検出状況
(北から)

高鍋町文化財調査報告書 第6集

町内遺跡発掘調査報告書

老瀬坂上第2遺跡
高鍋城跡

1991年3月

編集・発行 宮崎県児湯郡高鍋町教育委員会

印 刷 (有)印刷センタークロダ
宮崎市大橋2丁目175番地
〒880 電話24-4351番

